

あるむぜお45

府中市郷土の森だより

a / museo NO. 45

1998年9月20日

園内歳時記

郷土の森園内の秋は、水田の赤トンボや樹々の紅葉に彩られ、何となく物静かな景観がロマンチックな装いを感じさせてくれます。秋の草花の代表といえば、古き時代より親しまれ、万葉集にも詠われた“秋の七草”。

萩が花(ハギ)、尾花(ススキ)、葛花(クズ)、撫子
の花(ナデシコ)、女郎花(オミナエシ)、また藤袴
(フジバカマ)、朝顔の花(キキョウ)

今はもう府中では見られなくなってしまった種類もあって、なかなか郷土の森にも全てが揃うことはないのですが.....そこでご注目！郷土の森が独自に決めた秋の七草のひとつ、コスモス”を紹介しましょう。



♪薄紅の秋桜^{コスモス}が秋の日の～♪なんて歌を思い出しますが、まさに秋を彩る花のイメージにぴったりの種類ではありませんか。コスモスとはギリシャ語で‘飾る’とか‘美しい’という意味で、英語になると‘宇宙’、‘調和’といった意味になります。キクの仲間なので、日本的な風貌を漂わせていますが、実はメキシコ産の植物。改良され、八重咲き、コラレット咲き、ふく輪咲きなどと品種も豊富です。園内、長屋門近くの木道^{もくどう}から眺めるコスモス群落は、郷土の森の秋を十分に満喫させてくれることでしょう。

あなたも、あなた自身の秋の七草を探して園内を歩いてみてください。きっと見つかるはずですよ！

ミニ展

農の風景－耕作図の世界－

9月20日(日)～10月18日(日)

6月に子供たちと田植えをした郷土の森の水田では、夏休み中は、草取りに悪戦苦闘し、この前は、思い思いの案山子をこしらえました。今は、実り具合も順調で、10月の稲刈りが楽しみです。

人々は、来る年も来る年も折節の農作業を営んできました。村の景観も社会のあり方も、農事暦を軸にして、性格付けられてきたとも言えます。

そんな稲作の1年の作業の様子を、四季折々の自然景観とともに描いた「耕作図」というジャンルこうさくずの絵画が江戸時代にたくさん作られました。その中のひとつ、昨年度、当博物館で入手した伝野安信のぶ作の「耕作図巻」を中心にして、「耕作図」の世界を垣間見てみたいと思います。



収穫の秋 ▶

脱穀の後は、山あり川ありの風景が続く。真っ赤に紅葉した木々。たっぷりとした秋の景色を描いた後は、村の祭礼らしき場面で「猿回し」が登場。

日本の「耕作図」は、もともと中国の「耕織図」がお手本になっている。皇帝が農民の労苦を知るためのテキストだった。日本に伝わると、四季を描く「月次絵」の性格が大きくなる。中国的な人の姿と豊富な自然描写は、この「耕作図」が、日本的な「耕作図」に至る過渡期的なものであることを示す。(小野 一之)

脱穀の風景

稲束の山を囲んで、男たちが何やら棒で叩いている。実を振るい落とす脱穀作業だ。「棒打ち」は普通、麦の脱穀だが、これは稲。道具は「クルリ棒」。となりで、暖かく見守っている「翁」はいったい誰だ。働いている人たちが、中国人のような顔立ちと服装をしているのも、どうして？



同時開催 9/20(日)～10/18(日)

ミニ展 **埋められた銭の謎を探る**

市内で最近出土した中世の16万枚の渡来銭を紹介し、なぜ銭が埋められたかを考える。

次回開催 企画展 **収蔵品展** 11/8(日)～12/6(日)

郷土芸能と縁日の森 10/10(祝)・11日(日)に開催



府中市郷土の森にて

みて よんで あるいて ②

—蚕が国家を変えた—

小野 一之

まずは気軽に郷土の森見物。本を読んで考えるのもいい。他の博物館にも行こう。

1

やっぱりまた郷土の森に来てくれましたね。しかも草薺き農家に。土間を抜ける風はもう秋の気配です。

昔の農家は「夏は涼しく冬は暖かい」という話もありますが、ちょっと信じられません。隙間だらけの家ですから、寒くて仕方なかったのでは。それなら、ということで板の間の広間を区切って座敷にし、炉を切り、屋根に煙出しまで設けて、部屋を暖めるための大改造をした農家が、郷土の森には保存されています。この農家が最初に建てられたのは江戸中期、改築は明治末期です。もっともこの改造は住む人間のためではなく、蚕のためだったのですが。

2

蚕という一種の蛾の幼虫を飼い、糸を吐かせて繭にして、絹糸の元になる生糸を作る仕事を養蚕といいます。明治から昭和の初めにかけて、農家の副業として盛んに行われていました。

養蚕には、蚕を飼うためのスペースと暖かさがが必要です。そこで多くの農家が養蚕の作業場として改築されました。母屋なのに、人は蚕よりも小さくなって暮らすことになったばかりか、たいへんな重労働が待っていました。春から晩秋まで年4回の養蚕を、本業の農業の合間にこなしていかなければなりません。蚕の餌にするための桑畑も一面に作られ、村の景観まで一変してしまいました。

3

そんな養蚕も、戦後はナイロンな

どの化学繊維に押され、輸出もなくなり廃れてしまいました。たくさんあった東京の多摩地域の養蚕農家も今日では全く残っていません。

瓜生卓造『檜原村紀聞』(平凡社ライブラリー)は、養蚕と薪炭だけが目玉産業だった山里(西多摩郡檜原村)の生活誌を味わい深く綴っています。今は、飛騨の合掌造りにも劣らぬ豪壮な兜造りの民家群が、かつてを記憶して建っています。この建物でも2階から4階は養蚕の作業場だったのです。かつての養蚕王国信州の伊那谷に取材した『かいこの村1953』(復刻ワイド版岩波写真文庫)は、「人々はこの産業がどんな運命をたどっているかもはっきり知らずに今日もなおこの仕事を続け、明日もまたそのために働くであろう」日々の最後の輝きを愛惜を込めて活写しています。

4

府中でも、ちょうど市制施行の1954(昭和29)年頃に境に養蚕はなくなりました。しかし、府中市郷土の森では、旧河内家を、養蚕のための改築時に復元し、往時を記念しています。常設展示室の養蚕を紹介したコーナーもご覧ください。

羽村市郷土博物館に移築された養蚕農家などとの比較も楽しみます。

多摩地域では、ほかに、明治の開国後に大量の生糸を横浜港に運んだ「シルクロード」に因んだ絹の道資料館(八王子市)、明治の農商務省蚕病試験場の陳列室の伝統を継ぐ東京農工大学附属繊維博物館(小金井市)などが見逃せません。

また、長野県・群馬県・埼玉県などかつて養蚕が盛んだった地域の博物館を巡れば、養蚕の時代の確かな足跡を見つけることができるでしょう。

5

ところで、養蚕は農家の貴重な現金収入源で、農村を潤したのは事実としても、それだけの説明では歴史は見えてこないように思います。蚕の力は農家建築だけではなく、国家のあり方さえ変えてしまったのです。

中村政則『労働者と農民』(小学館ライブラリー)がそのメカニズムをダイナミックに描いているように、明治期に花形産業として日本経済を支えていた生糸は、特に日清戦争後の富国強兵政策の中で急激に輸出を伸ばし、それで得た外貨で軍艦や兵器、重工業製品を輸入するといった貿易構造を作ったのです。養蚕農家は急増し、一方では繭から糸を繰るのを専門にする製糸工場が誕生します。山本茂実『あゝ野麦峠』(角川文庫・朝日文庫)で知られるようになった長野県諏訪で働く製糸工女の悲劇もそこに始まりました。「蚕が軍艦に化けた」といわれたように、こうして日本は日露戦争に勝ち進む軍事大国になったのです。

府中の農家から買い集められた大量の繭も、諏訪の製糸工場にもたらされていたことがわかっています。

6

突然、ザーツという音が農家に響きました。蚕が桑の葉を食べる音が、それとも季節外れの夕立か。どうやら、炉端に長居し過ぎたようです。



ストーンヘンジ

今回の旅は天文学、科学の歴史に直に触れるチャンスだという漠然とした思いでヨーロッパの地に足を踏み入れた。確かにそこには想像を絶する実物たちが待ち受けていた。自分自身の不勉強もあって十分な収穫があったとは必ずしも言い切れないが、1回の訪問ではとても吸収しきれない圧倒的な量の“物”があった。イギリスでの経験を中心に博物館やプラネタリウム、遺跡などの様子を感じたままに紹介する。

▼大英博物館

最初の衝撃は、大英帝国の繁栄の歴史を象徴するかのようロンドン市内に建つ、古代ギリシャの神殿を思わせる巨大な“大英博物館”だ。ここには、世界史に必ず登場するロゼッタストーンやエジプトのミイラなど数え切れないほどの展示物がある。さらに、星座の歴史を語る上でも重要な、星座発祥の地と言われる古代メソポタミアの“境界石（バウンダリーストーン）”やギリシャ神話を題材にした絵が描かれる“壺”やオリンポスの神々の像など天文の啓蒙書によく出てくる写真の本物が、大量にあり、時間を忘れて写真やビデオを撮った。境界石は神々から王がその地の正当な支配者である証として作られたもので、全てに神々を現す“太陽・月・金星”が最上部に、中には黄道12星座になっている“さそり”や“いて”が描かれているものもあり、星座との関係性を思わせるものもあった。そしてギリシャ壺と言われる壺に登場するのは、怪力の持ち主ヘラクレス、戦の神アテナ、太陽神アポロンなどさまざまな神話に登場する人物たちだ。神話

がいかに人々の間に浸透していたか伺われるほど多く描かれていた。そして、館内のミュージアムショップの一つはちょっとした本屋さんで、様々な分野の解説書が数多くあり、興味があつたものを文献を通してさらに学習できるようになっていて、思わず何冊もの解説書を購入してしまった。

境界石
大英博物館

国立科学博物館では、さまざまな科学史上重要な物が多数展示されていた。全く残念なことに、十分な時間が取れなかったので天文と光学に関する展示しか見ることは出来なかった。しかし、超新星の残骸であるM1をかにの様だといって“カニ星雲”と名付けたロケットの展示を始めとし、中世以降作られたさまざまな観測機器など、ここでも膨大な数の展示品に圧倒されっぱなしだった。やはり実物がこれだけあると説得力が違う。次に自然史博物館も見学した。ここでは、自然史系にありがちなただ物を並べるだけの展示ではなく、さまざまな工夫が随所に見られ、今後日本からも学芸員や展示業者が訪れ、日本の博物館でも展示の参考にされるだろうという展示だった。大英博物館で

もそうだったが、再び訪れる価値のある（必ずいつか戻ってくることを心に誓いつつこれら施設を後にした。）施設だ。

▼プラネタリウム

今回の旅行の最大の目的の一つであるIPS(国際プラネタリウム協会)コンファレンスのスケジュールには、ロンドンプラネタリウムでのデモンストレーションも含まれていた。このプラネタリウムは蠟人形館として有名なマダムタッソーに併設されており、観光地ということもあってシオウ的要素を重視したプラネタリウムだった。今回は新しい映像システムのデモンストレーションなどをいくつか見学したが、ドーム全体に映し出される大型映像はフィルムだけの選択肢ではなく、ビデオプロジェクターを何台も用いて明るくきれいに写し出される時代になってきていることを感じた。

さて、イギリスには天文学を語る上で非常に重要な場所がある。それは現在世界の経度そして標準時の起点にもなっている“グリニッジ天文台”だ。現在ここは展示とプラネタリウムがあり、プラネタリウムでは経度の話の当然の様にやっていたが、投影機はスピッツ社製で小型のかわいらしいもので、ドーム径も9mと大きくなく、生解説の素晴らしい投影だった。ここには様々な天体観測機器の他に、いろいろな時計も展示しており、かつて世界の中心はイギリスにあったことを感じさせられた。

▼ストーンサークル

そしてイギリスには古代遺跡としても重要なストーンサークルがたくさんある。その中でも特に有名なエイベブリーとストーンヘンジを訪ねることができた。これら巨石構造物は古代の天文台の役目も兼ねていたという説もあり(真偽は定かではないが、個人的にはそんな利用もされていたと思いたいし、訪れてその思いはより強くなった。)、そんな中に入って昔を思う機会が出来ただけでも大収穫であった。

エイベブリーは、中に牧場地があり、羊がいて、何軒かの家があったり、とても大きなサークルだった。それに比べればストーンヘンジの方が遥かに有名でさぞかし大きなものだろうと想像していたら、意外とこじんまりした印象だった。しかしその中に入ると、これだけのものを作った古代人に対する畏敬の念と、もしかすると天体(太陽や月)の運行を記録にとどめておきたいといった思いもあったのではと、感じずにはいられなかった。ところで、ストーンヘンジは現在サークルの中に入ることが出来ないようになっている(以前遺跡に落書きの掘込みがあったとかでそうなったようです。ほんの出来心かもしれないが、その人の

ために多くの人利益を受けられなくなる。自分の行動にはくれぐれも注意が必要だ。)が、IPSメンバーには一般入場終了後、特別に入れる配慮がされたため、実際に石にも触れることが出来、貴重な体験となった。やはり悔やまれるのがここでも自分の不勉強、もう少し知識を持って見れば違った見方ができたのではないかと思うと残念でしょうがない。

▼パリ

さて、ストーンヘンジの翌日、ユーロトンネルを抜けてパリへと入る。そこで待ち受けていたものは、イギリスと全くといっていいほど似た景色。ここでは一体何が待ち受けているのかとどきどきしながら、ホテルを目指す。ホテルはルーブル美術館の近くで、他にはエジプトから贈られたという巨大なオペリスクの立つコンコルド広場も近く、初日には歩いて“発見の館”のプラネタリウムを見学した。ここでは、最新式のプラネタリウムが美しい星像で待ち構えていた。投影機はツアイス社製のスターマスター、一球式で星像も明るく近年になく好感の持てる機械だった。投影は日本の小学校と中学校の学習投影をまぜたような内容で、それを小学校位の子供連れの親子が見ていた。日本の投影とは随分印象が違い、プラネタリウムの機能を活かした天文教育に取り組んでいる様子が伺え、これを当り前のように熱心に聞き入り、解説者からの問いかけに素直に応じている子供達の様子が印象的だった。そして、ここも充実した展示であったが、館名の示す通りサイエンスショーのコーナーが多いのが特徴のようだった。



アルテミス ルーブル美術館

パリではこの他に、ルーブル美術館、ESA、産業科学館、パリ天文台、パンテオンなどを訪れた。また、ドイツではミュンヘンのドイツ博物館、フォーラム・デア・テクニク、ハイデルベルクの天体物理計算センターなどを訪ねた。とても全てをここで紹介できないのが残念だが、また機会がありましたら話させていたきたいと思う。とにかく、最近は全てアメリカと思っていた自分が恥ずかしくなるような、そんなことにも気付いたヨーロッパ旅行だった。

「がめらと〜きんで

この夏、郷土の森ではちょっとおかしのノスタルジーを体感した人たちがいっぱい！1960～80年代を思い起す、懐かしのサブカルチャーを集めた“ちょっとおかし展”が夏休み期間中に開催されました。東京オリンピックから阪神タイガース21年ぶりの優勝フィーバーまで、多様な分野に渡って展開したいわゆる“お宝”は、世代によって感じる部分は色々だったと思いますが、それぞれに堪能してもらえたのではないかと自負しています。

ちょっとおかしを振り返ること、それは自分史の再確認でもあるわけで、この先本当に博物となる可能性を秘めた、いわば博物館資料予備軍の数々がこの夏に語りかけてくれたことは、懐かしさに浸るだけでなく、未来に向けてもう一度原点に還ることの大切さを教えてくれたように思います。



会場内をウロウロしながら

、何度もアイドルのレコードを食い入るように眺めるお父さん、60年代も初頭の頃の茶の間風景を再現したオープンセットに身をのりだす人たち、アトム・鉄人のコミックスやリカちゃん、ミニカー、ソノシートなどを感慨深く観てまわりながら、あれ持ってた、これ集めてたと会話をはずませるグループで雰囲気は上々の展覧会でした。



今の子ども

たちにとっては、60年代も70年代も、そして80年代も未知の領域。ちょっとおかしという概念はおそらくないものと推察しますが、それでも“ウルトラマン”や“仮面ライダー”だけは人気の的だったのです。まさに時代を超越したキャラクターなんだと、ただ感心するばかり。

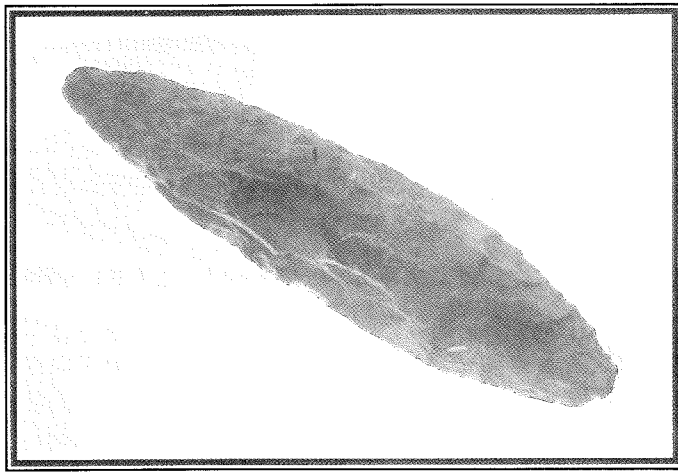


アッ、そうそう、期間中の日曜毎に出現したDJおじさんもごころさま。懐かしの昭和ヒットソングをドーナツ盤で聴かせてくれましたね。この音に誘われて会場に入ってきた人もずいぶん多かったみたい。それにしてもコスチュームのセンスが、ちょっといただけないようで！

縄文時代草創期の尖頭器

府中町佐藤ビル地区から

府中市教育委員会 江口 桂



(実物大)

今回は、これまででもっとも古い時代のお話です。先日、京王線府中駅北口の小金井街道沿いの発掘調査現場で、実に今から約1万1千年前に遡る縄文時代最古の段階（草創期）と考えられる尖頭器が見つかりました。尖頭器とは、縦長の左右対称形で、尖った頭をした石器のことです。おそらく槍の先に装着して、獣を獲る道具として使用されていたと考えられます。

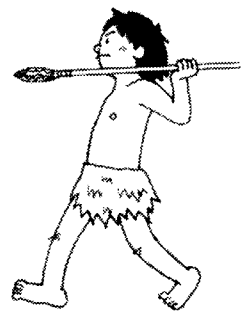
尖頭器が発見された場所は、現在の地面から約2.5m下で、1mほどの厚さに堆積した凹地の最下層です。この地層の中には、約1万1千年前に噴火した富士山火山灰の一つである、青柳スコリアが多量に含まれていました。これまで市内発見されている尖頭器は、その形態的な特徴から縄文時代草創期と考えられるものはありませんでしたが、いずれも出土層位がはっきりしなかったり、新しい時代の住居跡の埋まった土中から出土したりと、年代を特定できる具体的な例はありませんでした。今回発見された尖頭器は、出土した地層と形態的な特徴の両方から約1万1千年前の縄文時代草創期のものとわかったことで、非常に貴重な発見となりました。

この凹地の周辺から石器を作った跡は発見されていないので、当時この場所には小さな川が流れ、近くの集落から狩猟などの目的でやってきた人達の使っていた尖頭器が、川の中やその周辺に捨てられたものと考えられます。

尖頭器はほぼ完全な形で出土したため、両面加工が施され、左右ほぼ対象に仕上げられていることなど、その作り方が分かりました。たかが石器と思わなかれ、現代の私たちが作ろうと思っても、とうていできるものではありません。それほど、高度な石器製作技術を有していたのです。特に、細部の調整には、石器を強く圧迫することで石を割る「押圧剥離法」と呼ばれる技法が使われています。この技法はすでに2万年前頃の旧石器時代に出現していますが、縄文時代になるとさらに高度な技術の組み合わせが生まれ、より精緻な石器が作られたのです。

さらに、石の材質は「ガラス質黒色安山岩」と呼ばれるもので、これは現在の関東地方北部、主に群馬県を中心とした限られた地域でのみ採取できる石材です。黒曜石と比べるとその広がりには少ないものの、今から約1万1千年前の府中で生活していた人々が、自分たちの地域では採れない資源を他地域との交換によって獲得する交易活動をすでに行っていたことを示しています。

わずかに1点の石器からでも、その作り方や石材を観察することで、今から1万年以上前に府中で暮らしていた人々が、石材をどのように獲得し、どのように持ち運び、それをどう使ったのか、類推する資料となるのです。



石器の移り変わり

旧石器時代では、主にナイフ形石器（約3万5千〜1万8千年前）↓尖頭器（約1万8千〜1万1千年前）↓細石刃（約1万2千〜1万1千年前）と推移し、その終末期では、尖頭器と細石刃が両方使われていました。縄文時代に入ると、主に有舌尖頭器（約1万1千年前）↓石鏃（約1万年前〜）と変化し、石鏃の登場によって狩猟技術も急速に進歩します。今回紹介した尖頭器は、有舌尖頭器出現直前の旧石器時代から縄文時代へ移行する過渡期的な石器と言えるでしょう。

地元に残る古文書こもんじょを読みながら、近世史の勉強をする歴史講座には、3年間在籍できる初級、2年間の中級クラスがあり、修了生は自主グループで続けています。今回御登場くださるのは初級の講師をお願いしている堀新さん。毎月2回来館されます。本職は共立女子大学の先生です。

インタビュアー・Haruko



「先生には93年度から来ていただいておりますが、6年間の講座の印象から」

堀(以下H) H まず、受講生が非常に熱心なのと、クラス分けができていて環境が整っている印象がありますね。前任の松尾先生からの踏襲ですが初級の中でも、グループで読み合わせたり、2、3年目の人が1年目の人を指導したりと、おそらく学ぶ方もやり易く進んでいるのではないのでしょうか。

「この講座は開館以来続いているので、右往左往しながら今の形を整えてきたのですが…。大学でも教えていらっしゃるが、それと比べて地域の中で勉強していくことに就いてはどんなふうを考えてますか。」

H 府中ないし近辺に住む人が地元の史料を見ながら、郷土史というよりは近世、江戸時代というものの全体を考えるというスタイルは非常にいいやり方だと思います。今、大学生は学部ではまず古文書読みませんし…。おそらく多くの史学科の学生より専門的な科を基に学んでおられると思いますね。その場合でも地元のものなので皆さん非常に興味がありますし、土地鑑もあってとつき易いのではないのでしょうか。

一時代前の概説書だと、江戸時代の歴史っていうと江戸幕府の歴史みたいで、いろんな人が何考えて暮らしていたのかあまり分らなかったけれど、こういう地域の史料を読んでいくと断片的ではありますが見えてきますね。宿場関係でも、この間使った科にあつたんですが、助郷すけごうの村が「宿場の人間は担ぎやすい荷物は自分らで運んで、担ぎ難いのばかりこっちに回す」って訴えているんです。こういうのは幕府の交通政策の

史料には出てこない。目線を今の我々と同じにして歴史を見ていくという点でも、地域の史料を使うのは効果的だと思ってます。

「地元の古文書を読んで、府中のことを詳しく講義するやり方もあると思うんですが」

H 府中のことだけ学ぶというのも可能ではありますが…、木を見て森を見ずっていうか、郷土の森ですから…森も見なきゃいけないので。この講座でやっている様に、府中を丹念に見ることと周りの関係を見ていくことで全体、大きな森を見ることになるのではないかと思います。あとは講師がうまく森に扱げられるかということだと思いますけど。

「そういう意味でも地域の博物館がこの種の講座を開く意味はありますね」

H 勿論。地域の博物館でないとこういう形は取れませぬね。皆さんと一緒に解説していくことを通じて、僕自身も今まで新しい発見がありましたし、その中から新しい江戸時代像を切り開くのも可能だと思います。

「いずれにしても科外選びが大変ですよ」

H そのとおりなんです。この博物館でも沢山の史料を保管してますけれど、文字がある程度きれいで読み易く、虫食いが少なく、長すぎず、しかも3年間でいろんな内容のを読んでいただくとすると、条件をクリアするものは意外と少なくて苦労してます。

「せっかく地元のものでしたら、同じ史料ばかり使いまわすのもつまらないですしね。ところで受講生の平均年齢は比較的高いですが…」

H ふだんは19、11好の女の子ばかりを相手に…そのギャップはありますが…でも言わなくても予習復習をしてきてくれる熱心さで、質問もどんどん出るし、非常にやり甲斐があります。年を取られてから歴史の勉強を始められた方には、若い頃なぜできなかったかを話していただいたら今の若者に歴史に興味を持ってもらえるかもしれませんね。

ある学者が、阪神大震災の後で家族のアルバムをなくして悲しんでいる人が多かったが、地域の史料は地域にとってそのアルバムみたいなもので、その事に住民が気付いてくれたらいいのに、と言ってますが、全くそのとおりだと思うんです。大切に守っていききたいですね。

「博物館に代って言うていただいて…今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。ではそろそろ講座の時間ですので参りましょうか。」